

資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館報



竣工式 (H9. 4. 21)



開館記念講演会 (H9. 4. 21)



湯之奥金山遺跡見学会 (H9. 8. 2)



第1回公開講座 (H9. 10. 4)

新年明けましておめでとうございます

それぞれの家庭でつつがなく、健康で幸せに満ちあふれた、輝かしい平成10年の新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。

資料館も昨年4月に開館以来、10箇月余りが経過しましたが、これまでお寄せいただきました御指導・御協力に対し厚くお礼申し上げます。

この間、2万人のお客様をお迎えするとともに、開館記念講演会の開催、湯之奥金山遺跡見学会の実

施、公開講座の開催、館だより発行などの事業を行いました。また、平成9年9月2日には、湯之奥金山遺跡の一つを構成する中山金山遺跡が、国の史跡に指定されるというビッグニュースもありました。

木々の緑の深まりとともに開館2年目を迎えることとなりますが、館のもつ機能が十分に発揮できるよう最善の努力を傾注する所存ですので、今後とも御指導・御協力をお願いいたします。

「学際的」調査/考古学から

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長 谷口 一 夫

湯之奥／中山金山遺跡における考古学調査で、最初から注目された遺物に鉱石を粉成（こなす）のに使われた「鉱山臼」（挽き臼／回転臼）がありました。これぞ正しく鉱石粉碎用の臼ですから、この存在は中山金山遺跡にとって極めて重要でした。この鉱山臼の形はつい最近まで農家などで豆やトウモロコシなどを挽くのに使われていた「穀臼」と同様に、上臼と下臼がセットで構成されており、固い鉱石を挽いたと推定できる擦痕が上臼のすり面に回転状に何条も観察されたことから、鉱石を粉碎するのに使われたことは一目瞭然でした。

さらに、その個数の多さから、ここ中山金山における往時の操業の様子が推定できたことでした。

当然、この臼の存在は多くの方に知られていました。散逸を防ぐために幾つもの臼が地元の方々の努力で保存もされていました。しかし、一部は「金を生む」産金に使われたものですから、縁起ものとして都心の料亭の庭先に置かれたケースもあるとか、かなりの数の臼が流失したことも推測できます。

さて、調査の過程で幾つかのタイプの臼が存在することが解ってきました。回転臼のほかに目立った存在をしていたものの一つに石皿状の「磨り臼」がありました。この形のは縄文時代の石皿に似たものですが、観察すると表裏とも使われており、中心に穴があくほど使い込んだものがほとんどでした。一説には露頭へ出ていた鉱石は風化されていたため、すでに鉱石が脆くなっており、こうした臼で十分粉成ができたという解釈で、比較的初期段階の臼だったと位置付けています。

また、回転臼についても構造上幾つかの形態的な差異があることに気がきました。名称についても、いろいろな呼称があると研究上からも混乱がありますから、この臼のことを「挽き臼」というように統一することにしました。

湯之奥型の祖形となった
と思われる穀臼
(中山金山出土)



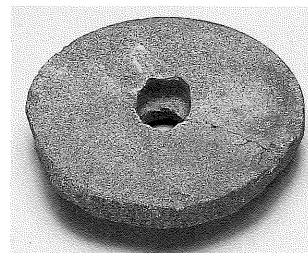
写真①

湯之奥型挽き臼
(中山金山出土)



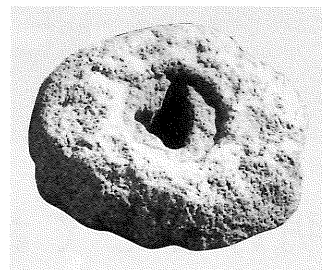
写真②

黒川型挽き臼
(黒川金山出土)



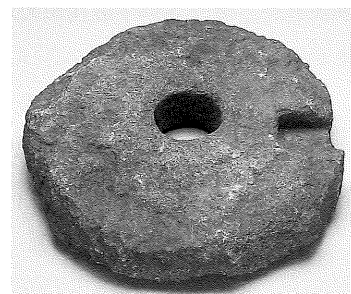
写真③

黒川型であるが有段供給口をもつ挽き臼
(大月金山金山出土)



写真④

各地で見られる定形
リング型挽き臼
(中山金山出土)



写真⑤

湯之奥／中山金山の発掘調査で発見された挽き臼をみますと、上臼に構造的な特徴があることが解ってきました。この特徴をもつ臼は、湯之奥／内山金山からも発見されています。写真②がそれです。これを機能的に観察しますと、上臼は回転させますから、当然中心を止める必要があります。事実、すり面の中心には軸受の穴があいています。下臼の中心に軸（鉄製）が残されていたものが内山金山から発見されていますので、これは中心を固定させておいて回転させるということは何の不思議もありません。

発見された挽き臼は、写真①にみられる穀臼と同様に、中心から少し外れたところに鉦石の供給口があり、写真①と写真②の構造はかなり酷似していることが解ります。ということは、初期の段階では穀臼が挽き臼のヒントになったとも考えられます。この供給口が中心から外れているタイプを湯之奥型挽き臼と呼ぶことにしました。鉦山臼としては、最古のものと考えられます。

さて、湯之奥／中山金山からはもう一つ違うタイプの挽き臼が存在することも解りました。それは写真⑤のリンズ型挽き臼です。定形型とも呼べる標準タイプの挽き臼です。これは湯之奥型の欠点と思われる部分が改良されているということで、湯之奥型より新しいタイプであることが解ります。供給口が中心から外れているタイプのもつ、鉦石がすぐ外へこぼれてしまうという欠陥を改良していることは十分推測できます。中心に大きな供給口をあけてしまっていますから、中心にリンズ（中心に軸受の穴があいている木片）を埋め込んで使うタイプです。これは湯之奥型より時代が下りますが、全国各地で使われているもので、佐渡相川金山や南部金沢金山などはこのタイプのものです。

ところで、湯之奥／中山金山の学際的発掘調査に先駆けて、塩山／黒川金山遺跡の調査があり、偶然にも我が国最初の金山遺跡調査は2件とも山梨県内で行われました。その塩山／黒川金山からは、たまたま湯之奥型と定形のリンズ型挽き臼の中間タイプの挽き臼が確認されました。写真③がそれです。特徴は供給口を中心にもってきていますが、リンズが使われていないタイプです。そのため、軸受があっても上臼が移動しますから、そのような軸受痕が中央供給口に幾つか残される結果となっています。機能的、構造的にはまさに中間タイプです。黒川型挽き臼と命名されています。

中山と黒川の金山衆については、元亀2年に武田信玄から深沢城攻略に対する御奉仕で中山金山衆拾人と黒川の金山衆（個別）に褒美が与えられていることから、同じ時期に両金山には金山衆が従事していたことは明らかなのですが、この臼の違いからみて技術的な交流は無かったといえます。互いの挽き臼が特徴的に自己主張している感じです。その後中山は定形リンズ型へと移行しましたが、黒川は黒川型だけで定形リンズ型は存在していません。むしろ、北海道、福井、岐阜、山梨／大月などに広域的な分布をみますから、黒川の金山衆の技術、もしくは金山衆そのものがある時期に全国へ散っていった姿が想定されます。

また、黒川型でも大月の金山金山（かなやまきんざん）については、写真④で見えるように、供給口入り口周りを一段下げた「有段供給口」を見せていて、黒川型の変形タイプとなっています。

このように鉦山臼＝挽き臼のあり方からも、そこに秘められている歴史的事実が少しずつ解明されていくということになります。

運営委員会委員に小林茂男議長を委嘱

平成9年12月5日、資料館運営委員会が開催され、席上小林茂男町議会議長が新委員として委嘱されました。これは、町議会議員の任期が満了したことに伴い、石部元章前議長が委員を退任されたためその後任委員として委嘱されたものです。

運営委員会は、資料館の有する教育的機能の充実を図り、健全な運営方法や展示計画等について調査

研究等を行い館長に提言するという任務を担っており、町内から4人、町外から5人の方を委員として委嘱しています。

当日の会議は、開館以来の諸事業と運営の総括のほか、開館1周年記念企画展など新年度における主催事業や館の運営方針などについて協議したもので、活発な意見が交わされました。

活動報告 公開講座

平成9年10月から6回にわたって開催している公開講座の第3回目が、平成9年12月7日(日)帝京大学山梨文化財研究所研究部長 萩原三雄先生を講師に迎え開催されました。「湯之奥金山と鉦山技術」というテーマのもと、砂金採取から山金採取への変遷、当時の鉦山技術の水準、採取から粉成、精錬までの一連の作業工程、鉦山用具、技術について、全国の金山事例の比較を加えながら講義してくださいました。

また、第4回目の講座は1月17日(土)に開講され、富士吉田市教育委員会文化振興課市史編さん係長 堀内 真先生が、「金山衆の暮らしと信仰」と

題し講義してくださいました。

金山などには数多くの伝説や伝承が残されているが、金山は一種不思議な世界であり、金山の村を伝承の中から明らかにするのは、すでに400年もの歴史の中で消えてしまったものが多く困難であり、そのためあくまで断片的な言い回しになってしまうこと、など各地に残っている金山に関する伝承を交えながら、民俗学的視点から語られました。

この公開講座は3月まで続き、月に1度のペースで開きます。第5回以降は次の日程で開講します。

その他詳しい情報は資料館までお問い合わせください。

戦国の金山を語る ―湯之奥から日本を考える―

回	期 日	演 題	講 師 名
第5回	2月8日(日)	武田氏と金山―その2	山梨県教育委員会 堀内 亨
第6回	3月8日(日)	今後の金山研究と資料館	帝京大学山梨文化財研究所 所長 谷口 一夫 (湯之奥金山資料館・館長)

会 場 湯之奥金山資料館多目的ホール(JR身延線下部温泉駅前)
時 間 午後2時～午後4時
受講料 無料

入館者の声

私と甲州金

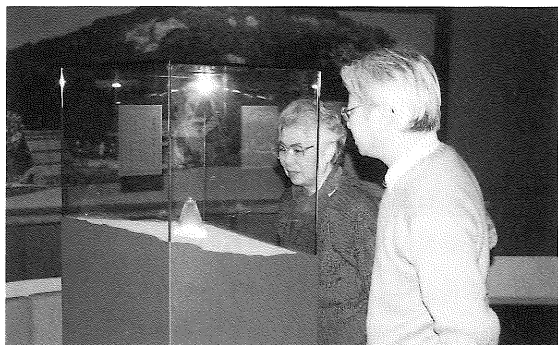
私が甲州金と初めて出会ったのは、下部町において蕎麦屋があるということを知り、そこの蕎麦を食べたいという単純な気持ちで下部町を訪れたことに始まりました。その店の片隅に置いてあった湯之奥金山資料館のパンフレットを目にして、軽い気持ちで入館したのが甲州金に魅せられてしまう契機になりました。もちろんそれまでは甲州金の存在も、まして下部町に金山があつたことなど知るよしもなく、驚きと戸惑いが交錯する長い一日でした。

資料館で見た燦然と輝く碁石大の金の塊を露一両金といい、甲州金の一つであるということが解ったのは平成9年5月上旬のことでした。その後、時間が経つにつれ丸みを帯びた輝きが脳裏から離れず、再度資料館を巡る展示ケース内の甲州金を目にしたとき、神秘的な輝きと丸みを帯びた形の虜になってし

まいりました。

それから私の図書館通いが始まり、書物をあさり甲州金について色々調べるようになりました。

甲州金の姿や形は奥深いものがあり、私に何か語りかけているようですが、とても理解できそうにありません。いつか私にも、語りかけていることが解る日がくることを思いつつ、資料館へと足が向く日々が続いています。(静岡県富士市 高岡伸五)



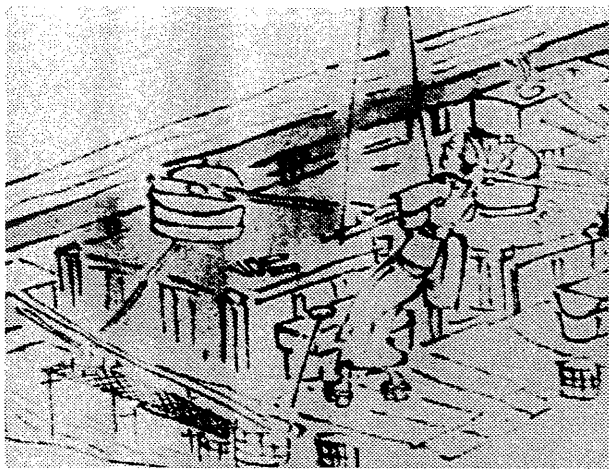
今回は平成9年12月17日付けの読売新聞岩手版に、
資料館建設に伴う調査活動に関する記事が掲載され

黄金花咲く

みちのく産金物語 第2部

昨年五月、山梨県下部町
の金山資料館建設委員会の
メンバー数人が大槌町金沢
地区を訪れた。

下部町は一九八九年の
「ふるさと創生事業」で、
武田信玄の隠し金山とされ
計画で建設され、今年四月



粉末状にした金鉱石を水と一緒に撚板上に流し、金を取り出す光景を描いた絵巻の一場面

のこ目のミステリー

◇ ⑫ ◇

甲州の技、北の地にも

金山絵巻

開館した。同地区を訪れた
当時は全国各地からの資料
収集の真つ最中だった。

一行は大槌町の金山遺跡
研究家・花石公夫さん(六〇)

の案内で、金沢金山の坑道
や精錬所跡、それに佐々木

正太郎さん(七〇)の方など数か
所を視察した。

佐々木さん方では、金沢
金山全盛当時の様子を描い

た「金沢御山大盛之図」と
題する絵巻を調べた。
絵巻は幅一十七センチ、長さ

三十一センチ、深さ一五センチ。地元で

れる。

一行は、盛岡市の県立博
物館で現物を調査。藍田の

人となり調べたため佐々
木さん方を訪ねたが、その

関心は、絵巻に描かれた
「撚板」にあった。

下部町の旧家に、幅一十
五センチ、長さ六十センチほどの杉

板が十一枚伝わる。この板
に斜め格子状に鋸目が切つ

てある。鋸目は一一・五
センチ間隔で幅〇・七一一・三

センチ、深さ一一・五センチ。地元で

見学に訪れた。そこで佐々
木さん所有の絵巻を眺める

うち、この板をめぐるなぞ
が解けた。
かぶり物をかぶった女性
が石臼を引く場面があり、
傍らに斜め格子状の線の入
った板が描かれている。そ
の様子から、佐渡のねこ板
同様、金をえり分ける道具
とわかった。「これだ、と
思いましたね。佐渡のね
こ板はむしろ布を敷いて
金を採取する技術の一端
を留める。しかし、撚
板が解明された」と、情報ネ

赤池さんらは、佐々木さ
ん方で、藍田が描いた旧金
沢村全景の絵図や伊勢参り
の旅日記などを調べ、引き
上げた。

花石さんは、「これでは
撚板の名称も用途もわかっ
ていた。しかし、現物は未
発見。実際にどういうもの
か、わからなかった。双方

の情報交換で金鉱石から
金を採取する技術の一端
を留める。しかし、撚
板が解明された」と、情報ネ

は「ねこ板」と言い伝えて
いた。板の上に「ねこ」と
呼ぶむしろや布を敷き、粉
末状にした金鉱石を水と共
に流して不純物を除く。金
をえり分ける道具の一つ
だ。

しかし、佐渡などに残る
ねこ板には鋸目がなく、下
部町の板は一体何なのか、
わからないままだった。

たまたま、東京・上野の
国立科学博物館に全国の鉱
山絵巻が展示され、委員が

板は鋸目に留める仕掛けだ
とわかった。鋸目の幅や深
さが微妙に違うのは、金粒
の大小をえり分ける工夫だ
だったのかも知れない」。資
料館を管理する下部町都市
交流室長の赤池一博さん「然
らうか」。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

甲州金 甲金、もしくは磐石金とも呼ばれる。戦国
時代、甲斐国を支配した武田氏が製造した金貨、とい
うより大きな金粒。露一両金、一分金、朱中金など各
種あり、重さは一匁(約三・七五グラム)から五匁(約一
八・七五グラム)まで数種。戦国期、軍用金や合戦の恩賞に使われ、甲
斐国の一部では武田氏滅亡後も貨幣として通用した。

施設の御案内 — その3 —

ミュージアムショップ②

平成10年の干支は戊寅（つちのえとら）。

ミュージアムショップの金関係の商品のなかで、根強い人気を誇っているのが「金箔テレカ」。

なかでも昨年末からの売れ筋は、やはり平成10年の干支である寅を描いた「干支金箔テレカ」。

これらのテレカは縦判、横判の2種類が用意して

あり、セットでお求めになるお客様がほとんどです。

十二支全てが用意してありますので、御自分の干支テレカはいかがでしょうか。

このほか、平成10年の「金箔カレンダー」もお薦めの商品。バックに入れておくと少しばかりリッチになった気分になるかも。

資料館ノートから — 民俗行事の紹介 —

1月の行事はお山飾り（柳飾り）、獅子舞、ドンド焼き、団子花作りなどたくさんあります。

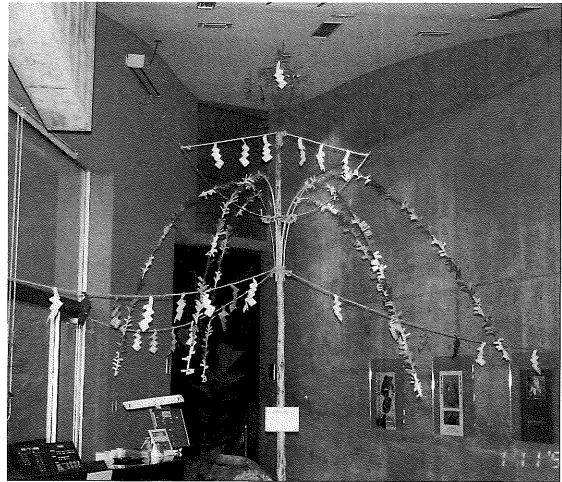
資料館を訪れた方に多くのことを知ってもらうため、お山飾り（柳飾り）と団子花を作りロビーに飾りました。

お山飾り（柳飾り）は集落内の道祖神場などに立てられ、戸数分に割った竹に色紙を巻き付けて枝垂れるようにし、幟竿の上部には細竹で弓を作り、弦で富士山に似せた形を作ることからお山飾りと言われ、また、柳のように枝垂れていることから柳飾りとも言われています。19日には倒して輪にして各戸に配り、屋根に供えて火難風難除けを祈ります。

団子花は檜などの枝振りの良い木を大黒柱などに縛り付け、それに米の粉で作った団子を刺し1年間の豊作を祈願する小正月の行事として昔から伝えられてきたもので、団子の形は各戸様々で、農家の願

望が団子の形に表れていますが、資料館では施設の性格にふさわしく、甲州金、小判、金の延べ棒など金に関するものを題材にしました。

色も赤、白、黄、緑など色とりどりで、ロビーが華やいだ雰囲気になりました。



編集後記

例年になく暖かい年明けでした。

1月2日から開館したところ、思いのほかの入り込みで驚きました。下部温泉での越年組の方、古里へ帰省された方、知人の紹介で来られた方、2回目の砂金取りに訪れた方などで混雑しました。

新年を迎えもう一つ驚いたことは3度の大雪。

降雪量も1m近くなり、1月16日に入館された新潟県の方も驚いていました。

資料館は日陰に位置しているうえ、駐車場からも距離があり、さらにメロディブリッジは除雪車も入らず職員全員で悪戦苦闘。

年末に地元旅館関係者の方が資料館の駐車場を清掃してくれました。全員額に汗して、木枯らしに吹き飛ばされた木の葉と奮闘。その量は膨大なもの。

お陰様でお客様を気持ち良くお迎えすることができました。温かい人の心に感謝を込めながら館だより第3号をお届けします。いよいよ開館2年目の年。

今年もよろしくお祈りします。

資料館だより

第3号
平成10年1月25日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015